図書館だより
文化学園図書館

文化学園大学・文化ファッション大学院大学
文化服装学院・文化外国語専門学校

No.157

2014年1月20日発行
東京都渋谷区代々木3～22～1
TEL.03-3299-2395
FAX.03-3299-2604

学ぶ心に火を点し、学ぶ喜びで未来を切り開く

国際交流センター　所長　柿島　由雄

現在、我が国の高等教育界では、教育の質の保証と学習成果の実証方法が活発に議論されている。アクティブ･ラーニング、ルーブリック、アセスメント･ポリシーなどがツールとして盛んに検討されている。これは、国民、メディア、産業界などから教育への投資効果が厳しく問われているからである。

しかし、一方で大衆化した教育現場では、教育の質や学習の成果より、まずは学生の勉学に取り組む姿勢、学習時間があまりにも少ないことが喫緊の課題とされている。かつては凡庸な学生で自らも勉強をしたとは決して言えない者がこんなことを書くのは気が引けるが、あえて深く自省して言う。大学生は、予習、復習と学校での勉学も含め、1日に8時間の学修時間が想定されている。だが現状は、ある調査によると授業時間も含めた平均的な勉強時間は1日4.5時間らしい。アルバイト等もあって大変であろうが、基本的に学生の仕事は1日8時間学ぶことである。

学習時間が少ない原因の一つには、まだまだ「学ぶ喜び、知的興奮」に気づいていない場合がある。では、どう学ぶ喜びを知るのか、そのきっかけは何気ない誰かの一言であったり、一冊の本との出会いかもしれない。学校では、教職員が学生に愛情を持って授業や学生指導を行い、学びの機会を提供し、学生の能力を最大化することに努めている。眠っている学びの心に、潜在能力に火を点す、インスパイア(inspire)することが学校の役割でもあるが、学生も知的興奮との出会いを求めて、ネット上だけでなく、好奇心を全開にして外に出て、直接人と話そう。あるいは、図書館で様々な分野の本を手に取って先人と語ろう。特に正解が一つでない課題や分野に挑戦してほしい。

人間社会にとって教育は最も重要な要素の一つであることは今さら言うまでもない。無知と愚昧の問題はすべて教育で解決されるが、同時に教育には学ぶ者の、自ら学びたい、知りたいという意思や意欲が不可欠である。学びの大切さに気づき、どう根づかせるかが課題である。できるだけ早めに、学ぶ喜びといつも考える習慣、思考回路を身につけるよう、アカデミックな図書館で修業してほしい。

最後に、歴史ある文化学園の職員であることを誇りに思うが、90年の伝統にすがることはできない。100周年を堂々と迎えたい。できるかどうかは、今いる教職員と学生の双肩にかかっている。たゆまぬ学ぶ喜びと真理への探究心が学生と本学園の未来を切り開く。

諏訪内晶子著『ヴァイオリンと翔る』

文化服装学院講師（生産管理･CAD担当）　上野　和博

1990年夏、バブル景気の終焉期、日本に明るいニュースが舞い込んできた。世界的に最も権威のあるクラシック音楽コンクールの一つ、チャイコフスキー国際コンクールのヴァイオリン部門、史上最年少の少女が審査員満場一致で優勝。受賞者は、まだあどけなさが残る18歳の諏訪内晶子（すわないあきこ）。「天才の中の天才」と言われ、以来、世界的な名声を博してきた。受賞後、華々しいステージが約束されていたはずだったが数年のブランクがある。演奏が証拠として残るCDデビューにも慎重さがうかがえる。クラシック音楽家のエッセイ本は少ない中、偶然書店で見つけたことが、この本を読むきっかけである。

私は幼少の頃から様々な音に触れてきた。鳥の鳴き声、打ち寄せる波の音、路面に響きわたる足音、壊れかけのトランジスタラジオから流れる音、コンサート会場に鳴り響くライヴ音、陸上自衛隊90式戦車の大砲音など。音は温度、湿度などの環境で刻々と変化する〝難解な生き物〟だから面白い。音楽の音源は、声楽、器楽など、アコースティックからシンセサイザーまで広範囲にわたる。社会人になってからは、古楽を含めクラシック音楽を好んで聴くようになった。1997年、著者のCDを聴いて、その音、旋律にすっかり魅了されてしまった。音はクリスタルガラスのように透明で輝かしく、さらに天然の漆をかけた工芸品のように艶がある。使用する楽器は、日本音楽財団から貸与されているストラディヴァリウス。その中でも三本の指に入り、かつてヤッシャ･ハイフェッツが使用していた「ドルフィン（Dolphin）」。それは、今年のセンター試験で難解な表現と騒がれた文芸評論家、小林秀雄が『音楽談義』という談話の中で「ヴァイオリニストの仕事は、ストラディヴァリウスとグァルネリ･デル･ジェス。（中略）この二つの楽器が本来もっている音を、どうやって完全に弾き出すかという仕事をする人のことを言うんです」と表現するほどの文化遺産なのである。

クラッシック音楽では、作曲家本人に直接会うことは不可能である。五線紙に書かれた譜面の奥に潜んだ作曲家の魂の叫びをくみ取って表現しなければならない。普通ならそこで終わってしまうのだが、著者は当時の時代背景などを交えながら音楽にする「表現者」として弾き出し、完璧な演奏をしている。演奏する行為は「身を削る」ことであり、自分の中に十分な蓄えがなければできない。そういった認識が著者にあり、本格的なプロデビューを前に充電期間として留学を決意することになる。それはコンクールのために犠牲にしてきた学業の時間を取り戻すためであり、また、これからの演奏活動に向けた蓄えを備えるためでもあったことがつづられている。

常に規則正しい生活を続けながら新しいものを見いだし、高い目標を掲げそれに邁進していく。聴衆を魅了するには200パーセントの準備を怠りなく、「演奏家である前に人として立派でありたい」と願う姿は、他の分野でも通ずることではないかと痛感する。

一見、華も実もある演奏家に見えるのだが、一人の女性が目に見えぬ重圧を感じながら、ヴァイオリンを通して様々な問題提起していることにプロフェッショナルとして真の姿を感じる。

＊諏訪内晶子著『ヴァイオリンと翔る』　日本放送出版協会　1995〈762.1/S〉

『暁斎画談』

文化学園大学助教（美術・博物館実習担当）　岡島　奈音

「古今の名手の筆意を後学の初心者たちに示し、その上で独自の技術を開発させ、ついには古人を追い抜く技量を体得させる」(*1)ことを目的として明治20（1887）年に刊行された本書は、江戸末期から明治にかけて活躍した絵師・河鍋暁斎（1831-89）の自伝と彼が習得した古画の筆法をまとめたものである。本書は内篇2冊と外篇2冊からなり、内篇は古人の筆法の集成、外篇は幼少期からの暁斎の画業を物語る種々のエピソードや弟子との信州写生旅行の模様を主な内容とする。暁斎本人が挿し絵を描き、文は瓜生政和が担当した。

圧倒的な画力を諧謔の精神で彩った河鍋暁斎は近年、日本美術史において再評価が進みつつある絵師の一人である。7歳で浮世絵師の歌川国芳に弟子入りするが、武士だった父親の教育方針から程なくここを去り、10歳で狩野派の前村洞和の門下に入る。19歳で修業を終えた後、同派絵師の養子となるが、22歳で離縁されたのを機に、土佐派から浮世絵まで画派を問わず筆法研究に勤しんだ。20代後半から「狂斎」の号を用いて戯画、あるいは狂画と呼ばれる滑稽な絵を描くようになり、戯画・狂画は彼の代名詞となる。以後、狩野派絵画と浮世絵、両領域で縦横無尽に筆を振るった狂斎だったが、不惑の年、上野・不忍池で開催された書画会での席画が貴顕を愚弄するものとして、3月の間獄に繋がれた。釈放後は号を「狂斎」から同音の「暁斎」に改めたものの、旺盛な活動は変わることなく、肉筆画、浮世絵、版本挿し絵のほか、戯作者の仮名垣魯文と組んで日本初の滑稽絵入り新聞『絵新聞日本地』を刊行するなど、健筆を振るう。「御用」と呼ばれる将軍家や大名家から発注された仕事で生計を立てていた狩野派絵師の多くが、徳川幕府から明治政府への政権交代に伴って仕事が激減、困窮した際も、幅広い顧客層を抱えた暁斎はこの窮状を乗り越えることができた。51歳の時、第2回内国勧業博覧会に出品した「枯木寒鴉図」で最高賞の妙技二等賞を受賞。晩年を迎えた暁斎宅をアーネスト・フェノロサと岡倉天心が訪れ、開校目前の東京美術学校の教授職を打診したという伝承も残されている。

もっとも、上記の半生を本書外篇の伝記部分からうかがい知ることは難しい。本文を執筆した瓜生政和は、梅亭金鵞の筆名を持つ戯作者で、滑稽絵入り新聞『團團珍聞』の主筆を務めた人物でもあるため、史実に沿って暁斎の半生を追うよりも、面白おかしいエピソードを連ねて戯作的な面白さに流れる傾向が随所に見られる。酒飲みで無鉄砲、信心深さもちらりと覗く江戸の人・暁斎の人となりは如実に伝わるが、生涯を知るには、飯島虚心著『河鍋暁斎翁伝』（ぺりかん社、1984年）を参照するのがよいだろう。

内篇では、暁斎による絵の学習方法が披瀝される。今でも人物画を学ぶ際に用いる、裸形を描いた上に衣服の線を重ねる学習方法（図1）を暁斎も経験していたことがわかる。ちなみに、この方法は宝暦13（1763）年に狩野派絵師・永良山晟が書いた画事の秘伝書にも記載があり、歴史ある学習法であることがわかる。ポーズ集などでは到底目にすることのないようなアクロバティックな動態表現（図2）は暁斎らしいもので、一見に値する。このほかには、暁斎による日中の古画の模写（図3）が並ぶ。室町時代の画僧である明兆・雪舟から、元信や探幽に代表される狩野派、中国の古画に、やまと絵の土佐派や住吉派、琳派に円山派、岩佐又兵衛や浮世絵師の菱川

師宣、喜多川歌麿に葛飾北斎などが載せられており、特に部分図からは、暁斎が個々の絵師の特徴をどのようにとらえていたのかを読み取ることができる。これらの手法は狩野派の画道修業そのものなのである。

若き日に狩野派に学んだ明治の日本画家・橋本雅邦(ほう)によれば、狩野派の画道修業は「臨写に始まり臨写に終る」(*2)とされている。臨写とは、手本を可能な限り忠実に写すことである。今日のごとき精緻な複写技術のなかった当時、狩野派の門弟は師匠から借り受けた絵手本を模写することで師匠の筆づかいや賦彩を学ぶと同時に、自分用の絵手本を手に入れることができた。一人前の絵師となった後も、古画を目にする機会に恵まれれば、模写して手元に残すことで絵師としてのひきだしを増やしたし、逆に絵手本を紛失した絵師が廃業に追い込まれたケースもあった。絵手本の収集に熱心な絵師宅では、「絵手本方」という役職を設けて保管・貸借の管理を徹底しており、こうした模写が狩野派絵師としての命脈を保つのに欠くことのできない存在であったことがわかる。

ところが、18世紀前半、秘伝とされていた狩野派の絵手本が、同派に連なる大阪の絵師・橘守国や大岡春卜(しゅんぼく)らによって次々と開板されたのである。公開された絵手本は広く巷間に流布し、古画を目にする機会など持つべくもなかった町絵師らによって積極的に図像が利用された。以降江戸時代を通じて、画派を問わず絵手本や図譜の類は多数刊行されている。本書もそうした時流に乗って出版されたのであろう。

興味深いことに、本書では随所に英文が交じっている。暁斎は弟子の中に外国人を複数抱えていた。最も知られているのは、平成22(2010)年に復元された三菱一号館を設計したイギリス人建築家のジョサイア・コンドルで、彼は「暁英」の号を贈られている。いささかぎこちない印象を受ける本書の英文をコンドルら英国人が書いたとは思えないが、本書中の英文表記は彼ら外国人との交流から着想を得て生まれたものに相違ない。明治の日本画家の作画意識や技法が述べられた同時代資料という観点からも、本書は得がたいものである。

図1　『暁斎画談』内上1ノ8
「河鍋暁斎筆　着服図法」

図2　『暁斎画談』内上1ノ8
「河鍋暁斎筆　着服図法」

図3　『暁斎画談』内上3ノ1
「東福寺殿司明兆ノ筆意」
「建長寺書記啓書記ノ筆意」

(*1)暁斎記念館「暁斎画談内篇外篇資料」『暁斎資料Ⅱ』、1982
(*2)橋本雅邦「木挽町画所」『国華』3号、1889

*飯島虚心『河鍋暁斎翁伝』べりかん社 1984 〈721.9/K〉
*飯島半十郎『河鍋暁斎翁伝』河鍋暁斎記念美術館 2012 〈721.9/K〉

繁栄か？自滅か？
新自由主義の限界と保守思想に関する近著

文化学園大学准教授（近代建築史、都市環境論ほか担当）　安野　彰

敢えて政治や経済の思想に関する著作を勧めてみます。日本は今、繁栄か？　没落か?という岐路にあって、ここから暫くの政策判断が私たちの未来に重大な影響を及ぼすと思われるためです。現況での予測は、ほとんどの日本人にとって悲観的なものですが、より多くの人が認識を深めれば、少しは増しな方向に修正されるかもしれません。

事態の把握は、固定観念に支配された新聞やテレビの報道に頼ると難しいのですが、いくつかの良著を踏まえると思いのほか容易です。データや歴史の検証から現況とその背景を的確に分析し、採るべき政策やその意味について具体的かつ分かりやすい言葉で発信しているのが、中野剛志氏や三橋貴明氏に代表される若手の論客たちです。中野氏は『TPP亡国論』で注目され、三橋氏主催のブログは日本で最も閲覧されています。ネットには彼らが出演する動画も多いので、それらの閲覧から始めてみるのも良いでしょう。

煎じ詰めると、長らく主流にある新自由主義を支持するか否かが論点です。新自由主義とは、経済活動に対する政府の関与をできるだけ小さくしようとする市場優先の思想で、規制を取り払い、自由化やグローバル化を唱えます。しだいに大企業や投資家の権利を民主主義より上位に置こうするので、一部の企業は大きく儲けますが、国や地域に固有の制度、文化などが同じようになっていったり、格差が広がったりします。こうした新自由主義の考え方は、多様な地域性と長い歴史を持つ日本の国柄や社会を壊し、結局は経済をも衰退させてしまう、というのが中野氏や三橋氏らの主張です。彼らは、社会秩序を保ちつつ徐々に改良を進めるという意味での保守主義や、経済の調整に政府が積極的に関与し、中流階級の経済活動を保護する立場をとります。新自由主義の前提とは異なる立脚点から語られる彼らの著作を読むと、問題の本質と愚かしさに気づかされるでしょう。

このうち、中野氏の近著『保守とは何だろうか』は、19世紀の英国で、詩人でありながら、資本主義経済のありようについて神がかり的な洞察を示したコールリッジの政治思想について論じつつ、自称保守政党の政権が新自由主義を推進するという奇妙な関係が続く現代日本の混乱について問うています。保守の本質を紡いだコールリッジの言葉は、200年の時を越えて現代日本の「惨状」を予言し、示唆に富みます。

さて、コールリッジのような「真正さ」を欠く我が国の「保守」政権は、選挙前に掲げた脱新自由主義的な主張を、選挙の後で簡単に覆し、日本の主権や国民の所得をグローバル企業や外国に売り渡すような「改革」案を過激に打ち出すようになりました。自ら破滅に向かう勢いすら感じます。

そんな理解し難い自滅願望を日本人の無意識下に見いだしているのが、佐藤健志氏による『震災ゴジラ!―戦後は破局へと回帰する』です。『ゴジラ』から『崖の上のポニョ』に至る作品の分析を通して、自滅への深層意識が形成される背景を、敗戦時や維新時の変節による歴史の断絶に求めています。自滅願望は、永続性を重視する正しい保守思想と相容れません。その成立ちと対処策を探る本書を併せて読んでみるのも良いでしょう。

*中野剛志著『TPP亡国論』集英社　2011〈678.3/N〉
*中野剛志著『保守とは何だろうか』NHK出版　2013〈311.4/N〉
*佐藤健志著『震災ゴジラ!―戦後は破局へと回帰する』VNC　2013〈304/S〉

図書館からのお知らせ

春季休暇貸出期間について

以下の期間、春季休暇貸出を実施します。

	新都心キャンパス	小平キャンパス
在学年次生・教職員		
貸出期間	2/6(木)～3/14(金)	2/6(木)～3/10(月)
返却日	4/10(木)	
卒業(修了)年次生		
貸出期間	2/6(木)～3/3(月)	
返却日	3/4(火)	

※卒業年次生の最終貸出日は3/3(月)です。以降の貸出はできませんのでご注意ください。

学内進学する学生の方へ

学内進学する学生は、進学が決定するまでは卒業年次生扱いとなります。3月上旬に進学決定後カウンターに申し出ていただくと、貸出期間・返却日が在学年次生と同じになります。

図書返却のお願い

延滞資料をお持ちの方は速やかに返却してください。資料の返却が遅れるとペナルティとして、一定期間、貸出・予約・取置き停止措置がとられます。

特に卒業年次に当たる学生は、借りたまま卒業しないようもう一度確認してください。図書館の資料は今後も多くの後輩たちに利用されるものです。郵送でも受け付けますので必ず返却してください。

閉館時の返却はブックポストをご利用ください。

年度契約の教職員および臨時職員の方へ

標記の職員で、平成26年度への継続が決定している方は、春季休暇特別貸出ができます。図書館カウンターに申し出てください。

3月で卒業(修了)する学生のみなさんへ

図書館は卒業後も利用することができます。ただし館内閲覧・コピーのみで、館外貸出はできません(閲覧・コピーも資料によっては制限があります)。

卒業生の入館受付時間は、月曜～金曜は9:30～17:00、土曜は10:00～16:00です。

利用の際には、卒業生であることを証明する下記のいずれかを受付に提示してください。

①同窓会会員証(大学:紫友会、学院:すみれ会・もみじ会、BFGU:OBOG会)

②卒業確認証

大学(新都心:教務課、小平:教学課)、学院(学務課)、BFGU(教学事務室)、BIL(教務部)各窓口で発行します。夜間と土曜日は、卒業確認証を発行できない窓口もありますので、事前にご確認ください。

なお、前期・後期の試験前から試験終了日まで、卒業生が利用できない期間があります。短縮開館期間などもありますので、詳細はホームページ「カレンダー(卒業生用)」で確認するか、電話で問い合わせてください。

※延滞資料がある間は利用できません。

OPACの検索結果から貴重書デジタルアーカイブへのリンクをはりました

OPACで検索して貴重書にヒットした場合、貴重書デジタルアーカイブに収録されているものにはリンク先URLが表示されます。改めてアーカイブを検索することなくWeb上で閲覧することができます。どうぞご活用ください。

不明な点は下記にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

TEL : 03-3299-2395(新都心キャンパス)
TEL : 042-327-8859(小平キャンパス)

http://lib.bunka.ac.jp